

国立大学法人大阪大学総長の業績評価について

令和6年3月28日

大阪大学総長選考・監察会議

国立大学法人大阪大学総長選考・監察会議規程第3条第2号並びに令和3年9月2日及び令和5年11月20日の総長選考・監察会議決定に基づき、総長任期2期目の3年目に行う業績評価として、令和5年3月から令和6年2月までの期間における業務執行状況の確認を行った。

1. 業務執行状況の確認方法

総長選考・監察会議は、総長から次の点について説明を求め、業務執行状況の確認を行った。

- 大阪大学の中長期的な経営ビジョンである「OU (Osaka University) マスタープラン 2027」の実現に向け、総長任期2期目の3年7カ月余りの期間で重点的に推進することとされている「ACE」プロジェクトに関する具体的な実績・成果及びその要因の分析結果と、それを踏まえた総長任期の最終年度に向けての展望（国際卓越研究大学の認定に向けた取組みを含む）や、「OU マスタープラン 2027」の主な進捗状況

上記の総長による業務執行状況の説明と総長に対する質疑応答の終了後に、

- 評価期間における業務執行状況の説明
 - 総長・執行部が推進する各種施策の学内への伝達、浸透状況
 - 学内構成員の多様な意見の吸い上げ、しっかりとした対応と取組みへの反映状況
- の観点と、現在の問題や最終年度に向け期待することなどについて、監事より説明を受けた後、監事との意見交換を行った。

2. 結果

総長任期2期目の2年7カ月余りが経過し、この間、「OU マスタープラン 2027」の実現に向け、適切なリーダーシップを発揮し、教育、研究、経営におけるそれぞれの持続可能な基盤整備や取組みを実行しており、総長としての責務を十分に果たしていると言える。

特に、重点的に推進することとしていた「ACE」プロジェクトの各取組みについては、着実に実行しており、その成果が現れている。

① 部局との意思疎通の強化 (Active Dialogue)

部局や構成員との対話については、着実に回数を重ね、個々の意見について真摯に傾聴していることは高く評価される。引き続きこのような対話を重ね、この対話の仕組みを組織風土として定着させていただきたい。また、こうした取組みの目指すところは様々な立場の構成員が大学経営を「わがこと」として考える風土を生み出し、そうした風土の中から大学の進むべき方向を決めていくことにある。OU マスタープラン実現加速事業の採択条件や部局の年度計画に OU マスタープランにどう資するか明確に記載を促すなど、構成員が大学経営を「わがこと」と考えるための仕組みも構築されており、こういった面でも高く評価できる。

一方で、部局や構成員からの意見やそれに対する執行部の対応を全学に共有することも重要であり、フィードバックの仕組みが構築されることを期待する。

② 財務基盤強化の実現 (Credible Financial Foundation)

財務基盤強化のため、ミッション実現加速化係数の影響により基幹経費が減少する中で運営費交付金全体を減少させなかったこと、大学の基盤的な教育研究活動を支援する部局等運営経費を維持したことは高く評価される。また、大学債による GIFT プロジェクトも具体化されており、物価高騰等の影響はあるものの、これらのプロジェクトを完遂していただきたい。

物価や人件費の高騰により大学の財政状況はますます厳しく、ミッション実現加速化係数の影響により今後は部局等運営経費の維持が困難となり、部局にも相応の負担がかかることが予想される。引き続き中長期的な財政シミュレーションを行い、その対策への検討が必要である。

③ 活力ある事務組織の構築 (Empowering Our Organization)

大学経営の高度化に向けて、DX の推進により事務職員の定型業務を減らし企画業務に割く時間を増やすことや、さらなる戦力化のために育成プログラムを通じて URA 業務を厚くするなど、様々な組織のエンパワメントに積極的に取り組んでいることは高く評価できる。

このような取組みは大阪大学以外の大学にとっても有益であり、日本全体の成長につながるものである。学生、教員、事務職員からの客観的な評価（効果測定）を行った上で、広く発信いただくことを期待する。

また、OU マスタープラン 2027 の進捗状況についても上記「ACE」プロジェクトを含め、着実に各種施策を実施しており、高く評価される。

特に、大学経営に関する対話を重視し、学外のステークホルダーとの共創を目指すための会合を複数回開催し、多くの意見を聴くなど、情報発信のみならず双方向の意見交換の場を増やしたことは評価に値する。率直な意見を引き出すために、会合の形態についても時と相手に応じて更なる工夫を行い、一層深みのある意見交換を実施していただきたい。

国際卓越研究大学においては実現に向けたストーリーをわかりやすく提示しつつ、候補に採択されるよう引き続き努力をお願いしたい。より一層の国際化が必要とされる中、最先端の取組みのみならず、各部局の役割やコミットメントを明確にする必要がある。引き続き部局との会話を促進し、目標を全構成員で共有し、各部局を巻き込んだ 10 年、20 年、30 年後に向けた構想を練ってもらうべく、総長のリーダーシップを発揮していただきたい。

最後に、組織を発展させるためには中長期的な計画や事業を次代のリーダーに継承していくことが重要である。来年度が総長任期の最終年度となるが、今まで積み上げた活動を次期執行部に継承するような仕組みや体制の構築を全力でしていただきたい。